

セッションⅠ テーマ：日本近世港町の社会・文化構造

神田 由 築

今年で11回を数える本学の国際日本学シンポジウムの特徴のひとつは、国際性・学際性にある。そこで、国際性・学際性を貫く「交流」というキーワードをもとに日本近世の港町にスポットをあて、その社会・文化構造の解明を通じて、ヒトやモノの交流がある社会にどのような影響をおよぼしてゆくのか、その具体像に迫ることをねらい、セッションⅠ「日本近世港町の社会・文化構造」を立てた。

日本近世の港町は、ヒト・モノや情報が交流する拠点として、ひとつの都市類型を進化させてきた。近年の都市史研究においては、たとえば本セッションの報告者も関わっている「身分的周縁論」や、都市史研究会の諸活動などを通して、都市内部における社会的結合や社会的諸関係に注目した研究が次々と成果をあげている。2006年に発足した科学研究費基盤研究（S）「16-19世紀、伝統社会の分節的な社会＝空間構造に関する比較類型論的研究（通称とらっど3）」の活動もそのひとつである。

本セッションでは、これらの研究成果をふまえ、社会的結合や諸関係の展開過程において、都市と都市との交流はどのように形成されていったのか、あるいは逆に、港町のような、ヒトやモノ・情報の交流の拠点である都市では、どのような社会的結合が取り結ばれていったのか、といった点に注目した。そして、港町独自の社会・文化構造を明らかにしながら、近世都市の特質を考察することを意図している。

なお、文化構造と銘打っているが、たしかに報

告のなかには芸能や陶器といった直接的に文化活動に関わる話も出てくるが、セッション全体としては、ある地域に生きる多様な集団の生きざまそのものを広義の文化とみなして、港町を基盤に活動する人びとの活動総体をとらえたいと思っている。

当日の進行は、はじめに四本の個別報告を行い、その後相互の論点を確認するためのディスカッションを設けた。四本の個別報告は、いずれも瀬戸内海地域にフィールドを設定している。これは、同地域が近世以前よりヒト・モノ・情報が交流する要衝だったことと、そのことで近世には多くの港町を発展させ、それら都市相互の交流を基盤に成熟をとげた地域だったことから、格好の素材として選択したためでもある。

以下、報告の概要を簡単に紹介する。一つ目の矢田純子氏報告「オランダ商館長の江戸参府と鞆の浦」と二つ目の後藤雅知氏報告「近世福山藩領における保命酒生産と鞆町の社会」は、いずれも備後国鞆の浦を取り上げている。鞆の浦は、古くから知られた良港で、しかも今なおその貴重な歴史的景観を保持している点で、まれにみる文化的遺産である。これまで歴史学よりも建築史や環境社会学といった分野で、おもに町並み保存や都市デザインなどの観点から注目されてきたが、この機会に、近世都市としての鞆の浦の社会構造に関する本格的な分析を行うことも意味があると考えられる。今回の報告がその一助となれば幸いである。

三つ目の森下徹氏報告「尾道の仲背と仲間」は、鞆の浦とも関係の深い尾道をフィールドに、中背

という社会集団を取り上げている。中背を通じた港町間の交流や、中背を取り巻く社会集団の成熟などが浮かびあがった。

四つ目の町田哲氏報告「近世後期徳島城下近郊における『胡乱人』対策と四国遍路」は、徳島藩の「胡乱人」対策を通して、徳島城下に集う人びとの社会的実態を追究して、そのなかで四国遍路の問題をとらえようとする。直接のフィールドは港町ではないが、四国遍路は瀬戸内地域（とくに四国内）の各地を結ぶ回国者の代表でもあり、それを藩の領内統制と絡めて描くことで、こうした“移動する人びと”を抱え込む都市社会の構造的特徴が見えてくる。本セッションの結びにふさわしい報告であった。

ディスカッションでは、鞆の浦から地元の研究者の方々を迎え、フィールドに根ざした港町の社会構造のさらなる解明が今後の課題として確認されたことがひとつの大きな成果である。また、矢田報告で紹介されたオランダ商館長一行の旅程は、瀬戸内海の潮の流れからみて信憑性があるとの貴重な指摘もなされた。

この他、歴史学・民俗学の分野から専門的な発言を得たことも成果である。これら質疑応答を通じて、幕末まで身分社会のロジックが展開したこと、遍路の問題などについては民俗学の成果も参考になるであろうこと、などが明らかになった。

以上、本セッションで展開された港町を行き交うさまざまな人びとの具体的な活動を通して、近世都市の社会・文化構造や人々の交流のありかたが少しでも展望できれば幸いである。